

2019年7月5日

各 位

公益財団法人 大同生命国際文化基金

2019年度(第34回)大同生命地域研究賞
受賞者の決定および贈呈式の開催

公益財団法人 大同生命国際文化基金(大阪市西区江戸堀1-2-1 理事長:喜田哲弘)
では、本年度の大同生命地域研究賞の受賞者を下記のとおり決定いたしました。

つきましては、贈呈式を以下のとおり開催いたします。
受賞者および、賞に関する資料を添付いたしますのでご覧ください。

記

1. 贈呈式

日時: 2019年7月19日(金) 14:00~

場所: 一般社団法人『クラブ関西』
大阪市北区堂島浜1丁目3-11 電話: 06(6341)5031

2. 受賞者

1) 大同生命地域研究賞(副賞300万円ならびに記念品)

追手門学院大学 名誉教授 重松 伸司 氏

2) 大同生命地域研究奨励賞(副賞100万円ならびに記念品)

埼玉大学大学院 人文社会科学研究科 准教授 遠藤 環 氏

慶應義塾大学 文学部 准教授 佐川 徹 氏

東京大学 東洋文化研究所 教授 名和 克郎 氏

3) 大同生命地域研究特別賞(副賞100万円ならびに記念品)

プノンペン王立大学 言語学部 教授 諏訪井 セタリン 氏
(ペン・セタリン)

以上

照会先: 公益財団法人 大同生命国際文化基金 事務局(市村・阪東)
電話: 06(6447)6357 FAX: 06(6447)6384

大同生命地域研究賞について

1. この賞を設けた趣旨

大同生命国際文化基金は、大同生命保険相互会社(当時)の創業80周年記念事業として、外務大臣の認可により1985年3月に設立された財団法人であります。その目的は「国際的相互理解の促進に寄与する」こととし、そのためにいくつかの事業を行ってきました。

この賞は、「地球的規模における地域研究」に貢献した研究者を顕彰するもので、様々な地域の人と文化に対する理解を究極の目的としている点で、本財団の設立目的と一致します。それはいわば国際的相互理解を考える上で最も基礎的な部分を担うもので、医学に例えれば臨床医学に対する基礎医学のような関係にあたります。こうした理解に立ち、関係学界の協力を得て、この賞を創設しました。

2. 対象とする地域

アジア、アフリカ、中南米、オセアニア(ただし、発展途上地域または周辺・辺境地域)。

3. 賞の内容

この賞は、次の3部門で構成されています。

(1) 大同生命地域研究賞

多年にわたって地域研究の発展に著しく貢献した研究者1名に対して、賞状、副賞300万円ならびに記念品を贈呈するものです。

(2) 大同生命地域研究奨励賞

地域研究の分野において新しい展開を試みるとともに、今後さらに活躍が期待される研究者3名に対して、賞状、副賞100万円ならびに記念品を贈呈するものです。

(3) 大同生命地域研究特別賞

対象地域を通じて、国際親善、国際貢献を深める上で功労のあった者1名に対して、賞状、副賞100万円ならびに記念品を贈呈するものです。

4. 選考

(1) 選考については、本財団が委嘱する選考委員で構成する会議により決定されます。2019年度の選考委員は次の5名です。

(五十音順)

早稲田大学人間科学学術院 教授	井上 真 氏
国立民族学博物館 名誉教授	印東 道子 氏
日本女子大学文学部 教授・同大学図書館 館長	臼杵 陽 氏
独立行政法人日本学術振興会 監事	小長谷 有紀 氏
京都大学大学院文学研究科 教授	松田 素二 氏

(2) 候補者の推薦については、全国の大学、研究機関等の研究者に推薦委員を委嘱し、推薦委員より書面による推薦を受けることを原則としています。

以上

2019年度

大同生命地域研究賞 受賞者

大同生命地域研究賞（1名）

「ベンガル湾海域文明圏の史学的研究」

追手門学院大学名誉教授

しげまつ しんじ
重松 伸司 氏

大同生命地域研究奨励賞（3名）

「タイなどの都市住民の生活とインフォーマル経済の研究」

埼玉大学大学院人文社会科学研究科准教授

えんどう たまき
遠藤 環 氏

「東アフリカ牧畜地域の紛争と平和に関する研究」

慶應義塾大学文学部准教授

さがわ とおる
佐川 徹 氏

「ネパール、ヒマラヤ地域における規範と行為の関係の
近代的変容に関する研究」

東京大学東洋文化研究所教授

なわ かつお
名和 克郎 氏

大同生命地域研究特別賞（1名）

「カンボジアにおける教育支援活動への貢献」

プノンペン王立大学言語学部教授

すわい
諏訪井 セタリン 氏
(ペン・セタリン)

2019年度
大同生命地域研究賞

重松 伸司 氏

追手門学院大学 名誉教授

略 歴

重松 伸司 (しげまつ しんじ)

- 1 . 現 職 : 追手門学院大学 名誉教授
- 2 . 最 終 学 歴 : 京都大学大学院 文学研究科 博士課程(東洋史学) 中途退学(1974年)
- 3 . 主 要 職 歴 : 1974年 京都大学 文学部 助手
1990年 名古屋大学 文学部 教授
1992年 名古屋大学 独立大学院 国際開発研究科教授
2001年 追手門学院大学 教授、図書館長、文学部長、副学長等
現在に至る
- 4 . 主 な 著 書 ・ 論 文 :
 - 『An Armenian Maritime Merchant in Modern Japan: The Apcar and Company and the Foreign Settlements in Kobe and Yokohama』[Occasional Paper, Rikkyo Univ.]2019
 - 『マラッカ海峡物語 ペナン島に見る多民族共生の歴史』集英社新書、単著、2019
 - 「17-18世紀初頭のインドにおけるアルメニア商人と東インド会社 「1688年協約」をめぐって」『移動と交流の近世アジア史』守川知子編著、北海道大学出版会、2016
 - 「The Ritual of Tai Pusam and the Role of Pandaram in Malaysia- Interpretation of an Ethnic Ritual of the Malaysian Indian Community-」『Spread and Influence of Hinduism and Buddhism in Asia』Originals, India, Sengaku MAEDA(ed.)2010
 - 『新詳高等世界史B』帝国書院、共著、2007-2011
 - 『カーストの民、ヒンドゥーの習俗と儀礼』平凡社東洋文庫 483, 訳・注・解説、2008
 - 『インドを知るための50章』明石書店、編著、2003
 - 『新訂増補南アジアを知る事典』平凡社、編著、2002
 - 「現代インドの社会開発と福祉開発 南インドのアメニティと人口」『アジアのダイナミズム - 経済と社会の変動』日本大学総合科学研究所、1999
 - 『国際移動の歴史社会学 近代タミル移民研究』名古屋大学出版会、単著、1999
 - 『インドのジェンダー・カースト・階級』監訳、明石書店、1996
 - 『変容するアジアと日本』リバティ書房、編著、1996
 - 『マドラス物語 海道のインド文化誌』中央公論社、単著、1993以上のほか、現在に至るまで論文著書多数
- 5 . 備 考 : 1999年 博士(文学)(京都大学)

業績紹介

「ベンガル湾海域文明圏の史学的研究」に対して

重松伸司氏は、京都大学文学部で東洋史学を学ぶかたわら、今西錦司氏の生態学とりわけスミワケ論や岩田慶治氏のコスモロジー論に強い関心を抱き、以来こうした日本発の独創的な発想を活かし、それらをパラダイムとしてアジア史学の領域に取り込み、かつ敷衍することによって、地域像を構築するという研究領域を新たに開拓してきた。

換言すれば、次のような三つの視点から地域の歴史を捉えることによって、「アジア社会という多様性の動態的統一」に成功している。

第一に、ミクロコスモスの視点。すなわち、街区など小さなコミュニティにおいても広大な歴史が内包されていること。

第二に、地域社会への視点。すなわち<国際 international>や<グローバル global>などの西欧的な規範によって設定される圏域ではなく、アジアの各地域に即して自律的な「生活圏」が存在し、なおかつそれらが相互に連関しあうという「複合連関関係」を構成していること。

第三に、スミワケの視点。すなわち、segregation や isolation という概念に明示されるような隔離や隔絶ではなく、スミワケという社会生態的な共存ないし相互補完の様相があること。

具体的には、以下のような業績が挙げられる。

第一の視点が強く反映された業績として、『マドラス物語 海道のインド文化誌』（1993）は、南インドの港市、マドラス（現チェンナイ）南郊のサントメ地区には、古くから東西文化の多様な交流が見られ、その一端である「サントメ木綿織」が東南アジアを経て、江戸期後半の染織・浮世絵に大きな影響を及ぼしたことを論じたものであり、キリスト教・南インド社会・江戸庶民文化を交差させた斬新な文化論として好評を得ている。

第二の視点は、とりわけインド移民研究に活かされ、インドから東南アジア諸地域にかけての間に、移動と定着を繰り返すという動態様式を浮かび上がらせた。

南インドセーラム県の一村落において戸数約 300 戸の戸別悉皆調査（1968～1990）を実施し、さらにこの農村からマレー半島中部パハン州キャメロン高原の紅茶栽培農園に移住した移民集団の実態調査（1980～1990）を行い、こうした実地調査の成果を『国際移動の歴史社会学 近代タミル移民研究』（1999）に集約し、タミル系ヒン

ドゥーの集団は移住先においても「寺院・講・祭礼」という文化・経済・社会要素が複合した独自の「仕組み」を維持することによって生活圏を確立していることを明らかにした。

さらに、2000年からはアルメニア人商人集団に焦点をしばり、西アジアから日本までを含む広域的な海域交易の史的展開を研究しており、現在、著書にまとめつつある。

第三の視点の代表的な業績として挙げられる『マラッカ海峡物語 ペナン島に見る多民族共生の歴史』（集英社新書 2019）は、マラッカ海峡圏域とりわけペナン島における多民族間の多様なスミワケ(co-habitat)社会の形成過程を明らかにしたものである。

これらの事例から明らかなように、実のところ三つの視点は相互に密接に結びついている。

以上のように、氏の研究は、日本発のユニークな発想と分析視角を利用した仮説実証型の論証研究であり、文献史料を重視する旧来の東洋史学にとどまらず、現地の綿密なフィールドワークに基づく聞き取りと、さらには現地の多様な資料類を利用する方法論に支えられている。インドの一村あるいはマレー半島の一農園など、常に一貫して、人々の生活圏に的を絞ってフォーカスを合わせつつ、同時に南アジア、東南アジアという旧来の枠組みさえも超えた、より広域的な地域における歴史的動きの軌跡として地域像を提示してきた。

近年のグローバルヒストリーの流行に先行する地域像の刷新であったと言える。

南インドやペナン島などベンガル湾海域において、諸集団が歴史的結果として共生する実態は、出自の異なる人びとがさらに交差し続ける未来社会を構想する上で、ひとつの羅針盤となるに違いない。

同氏の先駆的な貢献から、選考委員会は大同生命地域研究賞の授与を決定した。

（大同生命地域研究賞 選考委員会）

2019年度
大同生命地域研究奨励賞

遠藤 環 氏

埼玉大学大学院人文社会科学研究科 准教授

略 歴

遠藤 環 (えんどう たまき)

1. 現 職：埼玉大学大学院 人文社会科学研究科 准教授
2. 最終学歴：京都大学大学院 経済学研究科 博士後期課程単位取得退学 (2004年)
3. 主要職歴：2001年 日本学術振興会 (DC1)
2004年 日本学術振興会 (PD)
2008年 埼玉大学経済学部 講師
2011年 埼玉大学経済学部 准教授
2015年 埼玉大学大学院 人文社会科学研究科 准教授
現在に至る
4. 主な著書・論文：
遠藤環「タイのインフォーマル経済と新しい社会保障制度の模索 (連載：ポスト人口ボーナスのアジア4)」、『東亜』No.619、2019年1月、pp.94-105
遠藤環・伊藤亜聖・大泉啓一郎・後藤健太編『現代アジア経済論：「アジアの世紀」を学ぶ』、有斐閣、2018年3月
Endo, T., and M. Shibuya. “Urban Risk, Risk Response and Well-being in Asian Cities: The case of Tokyo, Shanghai and Bangkok”, *Procedia Engineering*, 2017, pp.976-984
遠藤環・青山和佳・韓載香[訳] (カビール, ナイラ著)『選択する力：バングラデシュ人女性によるロンドンとダッカの労働市場における意思決定』、ハーベスト社、2016年。(監修、翻訳、解説を担当)
遠藤環「『アジア化するアジア』と地域経済の再編：タイにおけるメガリージョンの形成と都市機能の変化」(企画特集：「アジアの地域経済・地域政策」)、『地域経済学研究』第31号、2016年、pp.2-18
Endo, Tamaki. *Living with Risk: Precarity & Bangkok's Urban Poor*, NUS Press in association with Kyoto University Press, Feb 2014
Goto, K., and T. Endo. “Labor-Intensive Industries in Middle-Income Countries: Traps, Challenges and the Importance of the Domestic Market”, *Journal of the Asia Pacific Economy*. Vol. 19, Issue 2, 2014, pp.369-386
Goto, K., and T. Endo. “Upgrading, relocating, informalising? Local strategies in the era of globalization: The Thai garment industry”, *Journal of Contemporary Asia*, Vol. 44. No.1, 2014, pp.1-18
遠藤環「バンコク都市下層民のリスク対応 (第8章)」、速水洋子・西真如・木村周平編『人間圏の再構築：熱帯社会の潜在力』、京都大学学術出版会、2012年、pp.239-269
遠藤環『都市を生きる人々：バンコク・都市下層民のリスク対応』(地域研究叢書シリーズ)、京都大学学術出版会、2011年

Endo, Tamaki. "Occupational Change and Upward Mobility of Low Income Residents in Bangkok", 『東南アジア研究』 Vol.48 No.2, 2010 年、pp.131-154

Endo, Tamaki. "From Formal to Informal? Global Restructuring and the Life Course of Women Workers in Thailand", *Gender, Technology and Development Journal*, Vol.9 No.3, 2005, pp.347-372

遠藤環「バンコクの都市コミュニティとネットワーク形成（第13章）」、田坂敏雄編『東アジア都市論の構想 - 東アジアの都市間競争とシビル・ソサエティ構想』、御茶の水書房、2005年、pp.423-450

遠藤環「タイにおける都市貧困政策とインフォーマルセクター論：二元論を超えて」、『アジア研究』第49巻第2号、2003年、pp.64-85

以上のほか、現在に至るまで論文著書多数

5 . 備 考：2007年 経済学博士（京都大学）

業績紹介

「タイなどの都市住民の生活とインフォーマル経済の研究」に対して

遠藤環氏は、経済学者として、地域研究者として、タイを中心とする東南アジア、北東アジアの諸国・地域における都市化の進展と都市計画の展開、そしてインフォーマル経済とそこに従事する下層都市住民のダイナミックな変容について、精力的な研究を続けている研究者である。同氏の研究および活動は次の4つの特長がある。

第1は、主著である『都市を生きる人々 - バンコク・都市下層民のリスク対応』（京都大学学術出版会、2011年）が、東南アジア地域研究に新たな地平を拓いたことである。

この本は、バンコクの2つのスラムに住む人々の職業、居住形態、生活の履歴を丹念に追い、同時にスラム住民を襲った2つの予期できなかったリスク、つまり住民が雇用されていた工場の地方や海外への移転に伴う突然の失職と、火災による住居の喪失というリスクに人々がどのように対応していったのかを、2年間の参与観察とその後の複数の訪問調査によって明らかにした力作である。

この本が画期的な点は、バンコク都市下層民ひとりひとりのライフヒストリーを再現しただけでなく、対象とする人々が自分たちの生活と職業をどのように意識し（自信や矜持を含めて）、将来をどのように展望しているのかを心の内面にまで分け入って分析しているところにある。

従来、都市のスラム住民に対する政府の対策は、不安定なインフォーマル分野から安定したフォーマル分野に人々を「移動させる」ことが最も重要であるとみなされてきた。

しかし、遠藤氏の研究によると、職業の安定性や収入の多寡だけではなく、仕事に対する自分自身の誇りや仕事の上での自由さ、将来自立していくことのできる可能性なども、人々の行動を規定する重要な要因であることが明らかにされた。

政府統計やサンプル調査を活用しての研究だけでは到達し得なかった貢献、すなわち参与観察をベースとした地域研究でなければ明らかにし得なかった重要な学術面での貢献である。

第2は、2018年3月に刊行された新しいアジア経済論の教科書（遠藤環・伊藤亜聖・大泉啓一郎・後藤健太編『現代アジア経済論 - 「アジアの世紀」を学ぶ』有斐閣）の編集において、筆頭編者として中心的な役割を果たした点である。

この本は、最近出版されたアジア経済に関する本のなかで最も質が高くまた刺激的な作品の一つである。この本は、「アジア経済の新局面」「越境するアジア」「躍動するアジア」「岐路に立つアジア」の4つの切り口から、序章、終章含めて合計15本の論文から構成されている。

遠藤氏はこのうち6つの論文にかかわり、都市化やインフォーマル経済の問題だけでなく、現代のアジアを捉える新しい視点として何が重要かを常に問いかける姿勢を示している。

第3は、ジェンダーや労働研究における国内外のネットワーク作りへの貢献である。

遠藤氏のインフォーマル経済への関心は、もともとこの分野の主たる担い手が女性であったことと強く関係している。彼女は、アジアの労働やジェンダー問題に取り組むために、アジアのみならず積極的に欧米諸国のグループとも交流を進めてきた。また、この分野の本であるナイラ・カビール著『選択する力：バングラデシュ人女性によるロンドンとダッカの労働市場における意思決定』（ハーベスト社、2016年）の翻訳を、ほぼ同じ世代の研究者と共同作業で進め、日本国内でのネットワーキングでも大きな貢献を果たしている。

第4は、遠藤氏が長年、日本タイ学会の運営（特にタイ研究者の定例研究会の企画と運営）に携わり、タイに関心のある若手研究者の交流と育成にも力を注いできた点である。2019年3月に定例研究会の幹事職を若手に譲ってから、タイをはじめ長年地域研究と現地調査に従事してきた人々の「オーラルヒストリー」の企画と記録作成を研究者仲間ともに開始した。これは目立たない作業ではあるが、若い世代へと地域研究をつなげる重要な仕事である。

以上のとおり、研究内容および研究ネットワーキングの両方で地域研究を牽引する研究者としての遠藤環氏の業績を高く評価し、また今後のさらなる研究展開に期待して、「大同生命地域研究奨励賞」にふさわしい研究者として選考した。

（大同生命地域研究賞 選考委員会）

2019年度
大同生命地域研究奨励賞

佐川 徹 氏

慶応義塾大学文学部 准教授

略 歴

佐川 徹（さがわ とおる）

1. 現 職：慶應義塾大学文学部 准教授
2. 最終学歴：京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科
五年一貫制博士課程修了（2009年）
3. 主要職歴：2010年 日本学術振興会 特別研究員 PD
2011年 京都大学大学院 アジア・アフリカ地域研究研究科 助教
2014年 慶應義塾大学 文学部 助教
2018年 慶應義塾大学 文学部 准教授
現在に至る
4. 主な著書・論文：
2019 「エチオピアにおける食料安全保障政策と激変する農牧民の生活 大規模開発事業との関係に注目して」 『アフリカ研究』 95: 13-25
Sagawa, Toru 2019 Waiting on a friend: Hospitality and gift to the ‘enemy’ in the Daasanach. *Nilo-Ethiopian Studies* 23: 1-16
2019 「『男らしさ』を相対化する ダサネッチの戦場体験」 太田至・曾我亨（編）『遊牧の思想 人類学がみる激動のアフリカ』 昭和堂、pp. 215-236
2019 「戦争と平和 人はなぜ戦うのか」 松村圭一郎・中川理・石井美保（編）『文化人類学の思考法』 世界思想社、pp. 124-136
2018 「友を待つ 東アフリカ牧畜社会における「敵」への歓待と贈与」 『哲学』 140: 147-183
2018 「フィールドワーク論」 桑山敬己・綾部真雄（編）『詳論 文化人類学』 ミネルヴァ書房、pp. 233-246
2016 「フロンティアの潜在力 エチオピアにおける土地収奪へのローカルレンジの対応」 遠藤貢（編）『武力紛争を越える せめぎ合う制度と戦略のなかで』 京都大学学術出版会、pp. 119-149
2015 「紛争多発地域における草の根の平和実践と介入者の役割 東アフリカ牧畜社会を事例に」 『平和研究』 44: 1-19
2015 「現代アフリカにおける土地をめぐる紛争と伝統的権威 特集にあたって」 『アジア・アフリカ地域研究』 14(2): 169-181
2012 「『敵』と結ぶ友人関係 東アフリカの紛争多発地域で生存を確保する」 速水洋子・西真如・木村周平（編）『講座生存基盤論 3 人間圏の再構築』 京都大学学術出版会、pp. 183-206
2011 『暴力と歓待の民族誌 東アフリカ牧畜社会の戦争と平和』 昭和堂
Sagawa, Toru 2010 Local potential for peace: Trans-ethnic cross-cutting ties among the Daasanech and their neighbors. In Christina Echi-Gabbert and Sophia Thubauville (eds.) *To Live with Others: Essays on Cultural Neighborhood in Southern Ethiopia*. Rüdiger Köppe Verlag. pp. 99-127

Sagawa, Toru 2010 Local order and human security after the proliferation of automatic rifles in East Africa. In Malcolm McIntosh and Alan Hunter (eds.) *New Perspectives on Human Security*. Greenleaf. pp.250-258

Sagawa, Toru 2010 Automatic rifles and social order amongst the Daasanach of conflict-ridden East Africa. *Nomadic Peoples* 14(1): 87-109

Sagawa, Toru 2010 War experiences and self-determination of the Daasanach in the conflict-ridden area of northeastern Africa. *Nilo-Ethiopian Studies* 14: 19-37

以上のほか、現在に至るまで論文著書多数

5 . 備 考 : 2009 年 地域研究博士 (京都大学)

業績紹介

「東アフリカ牧畜地域の紛争と平和に関する研究」に対して

佐川徹氏は、2001年から東アフリカの地域社会を対象として、主に文化人類学的観点から実証的研究を進めてきたアフリカ地域研究者である。

佐川氏が一貫して研究対象としてきたのは、この時期に激しい紛争を経験し社会の根幹を揺るがされてきたエチオピアとケニア、南スーダンの国境付近に位置する牧畜社会ダサネッチである。

東アフリカ牧畜地域は、国際的にも世界でもっとも人間の安全保障が脅かされた地域として言及され、紛争の頻発や極度の貧困など多様な課題を抱えた地域として知られる。同氏は、国民国家のそして国際社会の最周縁地域に生きる人びとの日常生活の現場を拠点として、長期にわたるフィールドワークを継続し、優れた研究業績をあげてきた。

佐川氏のこれまでの多岐にわたる研究業績は大別すると三つの研究関心にわけることができる。

第一の研究関心は、地域の集団間関係の論理を動的に解明した精緻で詳細な研究である。東アフリカ牧畜地域の集団間関係についての先行研究は多く存在するが、その中心的なアプローチは民族レベルの関係に焦点をあてたものだった。

それに対して佐川氏は、個人レベルの視点を研究に取り入れ、個人の社会関係や経験、感情の推移などが、集団間の紛争と平和の動態に決定的に重要な役割を果たしていることを説得的に示した。

この地域の牧畜社会には敵集団と戦うことを称揚する文化装置が存在するが、個人レベルで見れば過去の戦場体験に依拠して戦いに行くことをやめる個人がおり、また人びとは各人の決定を相互に受容する態度を共有している。

さらに、人びとは集団レベルでは敵に分類される民族の成員との間にも、友人関係や通婚関係、養子関係など多様な関係を築いている。これらの個人間の社会関係が、集団間関係の回復に大きく貢献していることを実証的に提示した佐川氏の研究は、国際的にみても先駆的なものである。

第二の関心テーマは、地域社会が有する平和の潜在力を探る研究である。佐川氏は、暴力を抑止したり共存を達成したりするための牧畜民による多様な実践を描き、それを「人びとが有する平和に向かうローカルな潜在力」として提

示した。

同氏は、地域社会に銃が流入する歴史的過程を再構成したうえで、強い殺傷力をもつ火器の導入が、紛争の現場を無秩序化したわけではないこと、人びとが多様な理由からむきだしの暴力の行使を自制するようになったことを明らかにしてみせた。また、今世紀に入り頻繁に実施されている政府や国際組織、NGOによる平和構築を目的とした介入においては、しばしば「排他的」と指摘される牧畜社会がじつは、状況に応じて住民相互の協力を構築してきたことを例示した。

このような佐川氏の研究から、実地調査に根ざした地域研究が、紛争多発地域における平和構築に寄与する知見が提供できることが示されたのである。

第三の研究関心は、大規模開発事業が地域社会に与える影響に関する研究である。21世紀に入り急速な経済成長を進めるアフリカでは、これまで中央政府からなかば放置されてきた辺境地域も大規模な開発事業の対象とされている。佐川氏が調査を進めるダサネッチ社会も、2000年代後半から大陸全土で進行している国家や大企業による土地収奪に加えて、大規模なダム開発や食料・現金の直接給付政策の対象地域となった。

佐川氏は、これらの事業によって地域社会の生活が劇的に変容する過程を、住民の事業に対する多様な意見や対応に丁寧に寄り添いながら分析を試みている。国家主導で強権的に進められる開発事業に関する調査はしばしば困難をとまなうが、長期の実地調査をとおして築きあげた住民との信頼関係に基づく同氏の研究成果は、国際的にもきわめて貴重な知見を提供している。

さらに同氏は、これら多様な研究成果を国内外で積極的に発信している。遊牧民研究を世界的にリードする国際ジャーナル *Nomadic Peoples* に掲載された佐川氏の論文は高い評価を得ている。また第三の研究関心について、同氏は21世紀のフロンティア地域の動態を地域間比較するための研究プロジェクトにも中心メンバーとして関与し、東南アジア地域研究や南アジア地域研究、中南米地域研究との協同と連携を推進している。

以上のように堅実で卓越した研究業績を重ねてきた佐川氏が優れた研究能力を有していることは明らかであり、将来的にも地域研究のさらなる発展に貢献する研究者として期待できることから、大同生命地域研究奨励賞にふさわしい研究者として選考した。

(大同生命地域研究賞 選考委員会)

2019年度
大同生命地域研究奨励賞

名和 克郎 氏

東京大学東洋文化研究所 教授

略 歴（見本）

名和 克郎（なわ かつお）

1. 現 職：東京大学 東洋文化研究所 教授
2. 最終学歴：東京大学大学院 総合文化研究科 超域文化科学専攻 博士課程修了
(1999年)
3. 主要職歴：2000年 日本学術振興会特別研究員（PD）
2000年 東京大学 東洋文化研究所 助教授
2007年 東京大学 東洋文化研究所 准教授
2013年 東京大学 東洋文化研究所 教授
現在に至る
4. 主な著書・論文：
Effects of Translation on the Invisible Power Wielded by Language in the Legal Sphere: The Case of Nepal. [Janny H. C. Leung and Alan Durant eds. *Meaning and Power in the Language of Law*. Cambridge University Press, pp. 95-117, 2018]
『体制転換期ネパールにおける「包摂」の諸相 言説政治・社会实践・生活世界』〔三元社，編著，2017〕
Triangulating the Nation State through Translation: Some Reflections on “Nation”, “Ethnicity”, “Religion”, and “Language” in Modern Japan, Germany and Nepal. [*Internationales Asienforum/ International Quarterly for Asian Studies* 47, no. 1+2: 11-31, 2016]
Pollution, Ontological Equality, or Unthinkable Series? Notes on Theorizations of South Asian Societies by Three Japanese Anthropologists. [*International Journal of South Asian Studies* 7: 31-57, 2015]
ネパール領ビヤンスにおける「政治」の変遷 村、パンチャーヤト、議会政党、マオイスト. [南真木人・石井溥編『現代ネパールの政治と社会 民主化とマオイストの影響の拡大』明石書店，pp. 175-206, 2015]
ネパールの「デモクラシー」を巡って 用語・歴史・現状〔『現代インド研究』5: 69-87, 2015〕
『東京大学東洋文化研究所所蔵 社団法人ネパール協会旧蔵資料目録』〔東京大学東洋文化研究所附属東洋学研究情報センター，編著，2013〕
『生業と生産の社会的布置 グローバリゼーションの民族誌のために』〔岩田書院，松井健・野林厚志との共編著，2012〕
ネパール領ビヤンスのランを巡る言語状況の変遷と文字使用. [砂野幸稔編『多言語主義再考 多言語状況の比較研究』三元社，pp.379-406. 2012]
『グローバリゼーションと 生きる世界 生業からみた人類学的現在』〔昭和堂，松井健・野林厚志との共編著，2011〕
ランの葬送儀礼における時空間の構成とその変化に関する試論. [西井凉子編『時間の人類学 情動・自然・社会空間』世界思想社，pp.358-382. 2011]

Nepalis Inside and Outside Nepal: Social Dynamics in Northern South Asia
Vol. 1. [Manohar, co-edited with Hiroshi Ishii and David N. Gellner. 2007]
*Political and Social Transformations in North India and Nepal: Social
Dynamics in Northern South Asia* Vol. 2 [Manohar, co-edited with Hiroshi
Ishii and David N. Gellner. 2007]

- ⑭ 山道歩きと風景写真- ネパール、ビヤンスにおける社会空間とその変容に関する試論.[西井涼子・田辺繁治編 『社会空間の人類学 マテリアリティ・主体・モダニティ』 世界思想社, pp.150-174. 2006]

Language Situation and 'Mother Tongue' in Byans, Far Western Nepal.
[*Studies in Nepali History and Society* 9(2): 261-291. 2004]

Ethnic Categories and their Usages in Byans, Far Western Nepal. [*European
Bulletin of Himalayan Research* 18(1): 36-57. 2000]

以上のほか、現在に至るまで論文著書多数

5 . 備 考 : 1 9 9 9 年 博 士 (学 術) (東 京 大 学 大 学 院 総 合 文 化 研 究 科)

業績紹介

「ネパール、ヒマラヤ地域における規範と行為の関係の近代の変容に関する研究」に対して

名和克郎氏は過去30年近くにわたり、ネパールを中心としたヒマラヤ地域の社会的文化的動態を、主に文化人類学的な観点から研究してきた。

その第一の成果は、大学院生時代から断続的に続けてきた、極西部ネパールのピャンス地方および周辺地域を故地とし「ラン」を自称する人々に対する長期にわたる一連の民族誌的研究である。

名和氏は、これまで「民族」とか「カースト」といった用語で論じられてきた社会的な集団の範疇がどのように歴史的に生成され構築されてきたのかを詳細に検討してきた。そのうえで日常世界に深く根付く宗教的儀礼の変容過程とそこに見いだされる慣習的行為、またその行為についての語りを通して構成される規範などの複雑に入り組んだ関係を緻密なデータで読み解いていった。

さらには多言語使用、翻訳、言語イデオロギーといった社会の構造と過程を規定する言語使用に関する問題系への解明にも力を注いできた。近年では生業や政治といった主題について、日常的な実践の細部にまで降り立った記述と分析という名和氏独特の方法を用いて精力的な研究を展開している。

こうした一連の研究は、過去2世紀にわたりネパール、インドという2つの国家に分断されてきたランの人々の地域社会を、チベットと南アジアという2つの文明の周縁で独自の位置をつくりだしてきたものにとらえ、より重層的で動態的な文明史的、文化動態論的な議論を展開してきた。

その成果は民族誌『ネパール、ピャンスおよび周辺地域における儀礼と社会範疇に関する民族誌的研究 もうひとつの「近代」の布置』として結実している。近年の論文では、前近代的ヒンドゥー王国から国王中心の開発独裁、民主化、内戦及びその後の移行期を経て世俗の連邦共和国へと大きく変化したネパール国家と、ネパール領に住むランとの関係の変容と複雑化について分析を深めている。

名和氏の研究のもう一つの特徴として、こうした極西部ネパールの地域社会を研究する人類学者としての仕事に加えて、より大きな南アジア世界・ネパール社会全体を対象とする学際的な研究の蓄積があげられる。

その代表的なものが、2017年刊行の編著『体制転換期ネパールにおける「包摂」の諸

相 言説政治・社会实践・生活世界』である。

この研究は、人類学者を中核としつつも他分野の研究者の参加と協力を得て、内戦終結後新憲法制定まで激しく変化するネパールの社会動態を、この時期広く用いられ議論されていた「包摂」の語を鍵概念として、多角的かつ精密に分析したものである。

また、ネパールの「民主主義」や法に関する氏の近年の一連の論考は、いずれも主にネパール語で書かれたネパールの法律その他の政府刊行文書に基づく、近現代ネパール国家による西洋起源の近代的な概念のネパール語への翻訳とそれが生み出した諸問題の分析を中核としたものである。

さらに名和氏はこうした研究の基盤となる資料の整理にも積極的で、『東京大学東洋文化研究所所蔵 社団法人ネパール協会旧蔵資料目録』の編集といった作業を行ってきた。こうした試みは地域研究の発展と共有の観点から高く評価できる。

名和氏はこのような研究の貢献に加えて、東京大学東洋文化研究所および国立民族学博物館などを拠点に組織されてきた共同研究会において、さまざまな分野の研究者を組織して共同研究を推進し多くの成果をあげてきたことも特筆される。また国際民族学・人類科学連合などの国際学会においても多くのパネル報告を組織し成果を発信してきた。

また名和氏は、香港中文大学の出版物で Routledge 社から刊行されている *Asian Anthropology* 誌の共同編集者をはじめ、日本語及び英語による文化人類学分野のみならずアジア研究、南アジア研究などの多くの地域研究の学術誌の編集委員等を歴任し、またカトマンドゥで毎年7月に行われる Annual Kathmandu Conference on Nepal and the Himalaya の運営委員を務めているほか、21世紀に日本語で出版されたネパール研究の書籍の目録を共同で作成し、ネパールの研究NGOより電子版を公開するなど、様々なスケールで研究の国際交流とアジアからの研究発信のための裏方的作業も継続して行っていることも高く評価できる。

以上のように、名和氏はネパールを中心とした南アジア地域研究において、日本のみならず、国際的な研究牽引者として業績を積み重ねてきた。これらの研究蓄積を高く評価し、今後のさらなる研究の進展を期待して、大同生命地域研究奨励賞にふさわしい研究者として選考した。

(大同生命地域研究賞 選考委員会)

2019年度
大同生命地域研究特別賞

諏訪井 セタリン 氏
(ペン・セタリン)

プノンペン王立大学言語学部 教授

略 歴

諏訪井 セタリン (すわい せたりん)

1. 現 職：プノンペン王立大学 言語学部教授
2. 最終学歴：法政大学 日本文学学科 博士後期課程 (2010年)
3. 主要職歴：1992年 東京外国語大学 非常勤講師
2000年 桜美林大学 非常勤講師
2001年 横浜国立大学 カンボジア語 非常勤講師
2004年 筑波大学 カンボジア語 非常勤講師
2010年 王立プノンペン大学 言語学部 教授
現在に至る
4. 主な論文：
「カンボジアと日本の仏教説話の比較研究 布施の観念を中心に」博士論文、
法政大学 2010年
「クメールクロムに於ける説話」(文部科学研究補助金)、2009年
「カンボジアと日本の仏教説話に見る布施」『国際日本学第6号』法政大学国際
日本学センター、2009年
「カンボジアの女性の表現」『社会文学第27号』2008年
「カンボジアにおける日本文学の受容」『法政大学日本文学誌第73号』2006年
「伝承で見る日本の龍神とカンボジアのナーガ 八百万の神々の中の龍神とカン
ボジアの精霊信仰のナーガ に対する考察」『国際日本学論叢, 2005 第3号』
「児童の絵画における遠近法」修士論文、1979年
5. 主な著書：
『クメール語入門:カンボジア語』連合出版、単著 2008年 10月
「カンボジアの歴史とクメールのこころ」『アジア世界のことばと文化』成文堂、
砂岡和子、池田雅之編著 2006年
『クメール語入門用語編』連合出版
『クメール語入門』連合出版、2004年
『アンコールワットの青い空の下で』(シハヌーク国王文学受賞作) Terra Inc 出
版、1999年
「バンテイアイ・スレイ物語」「アンコール・ワット物語」「乳海攪拌」など『ア
ンコールのモナリザたち』BAKU齊藤、草の根出版 2002年
「カンボジアの女性自立支援を通して」『アジアの中の日本を考える:女性学の視
点から』大阪女子大学女性学研究センター、田川健三編 1998年

『日本語 - カンボジア語辞典』メコン社 峰岸真琴、ペンセタリン編著 1993 年
『私は水玉のシマウマ』（日本とカンボジア文化比較）、講談社 1992 年
以上のほか、現在に至るまで論文著書多数

6 . 備 考 : 2010 年 3 月博士号取得 (法政大学)

業績紹介

「カンボジアにおける教育支援活動への貢献」に対して

諏訪井セタリン氏は、かつてフランスの植民地であったカンボジアで高校を卒業後、日本の文部省(当時)の留学生試験に合格。カンボジア人女性初の国費留学生として、今から約40年以上前に来日した。

その後、東京外国語大学付属の日本語学校を経て、東京学芸大に進み、将来カンボジアの発展に役立ちたいとの強い思いから「教育学」を学んだ。

そんな中で、ポル・ポト政権による極端な恐怖政治による知識層の弾圧、強制労働、殺戮が突如始まる。セタリン氏は家族と音信不通になり、とうとうカンボジアに帰国する途が閉ざされてしまったのである。

その後、日本とカンボジア間で国交がないヘン・サムリン政権下に、母国に一時帰国した際、小学校の教科書があまりに粗雑で殺伐とした内容であることに、同氏は愕然としたという。

内戦が続いていたカンボジアでは、教育の場に戦争の話が持ち込まれることが日常となっており、同氏はカンボジアの将来に強い危機感を抱いた。これが契機で1995年にNGO団体「CAPSEA」(東南アジア文化支援プロジェクト)を熱い思いを込めて立ち上げた。

「CAPSEA」では、日本人と協働し、カンボジアが何よりも必要とする平和的な内容の副読本を編纂のうえ、毎年カンボジアに直接配布する活動などに取り組んだ。

また女性の社会進出の一助とすべくプノンペン郊外に「女性自立センター」を開設し、カンボジアの伝統織物の研究保存会を立ち上げ、小さな村々を訪ね、子どもたちに紙芝居や絵本の読み聞かせをする「移動図書館」を開設するなど、貧しい子どもたちに夢を与える数々の取組みに大いに尽力した。

セタリン氏は翻訳家・文筆家としても類まれなる才能を発揮している。

日本・カンボジア両国の文化理解のために、「芥川龍之介、森鷗外短編集」「泉鏡花/夜叉が池、高野聖」「菊地寛/恩讐の彼方に」など日本の古典文学の数々を翻訳し、カンボジアの人々に紹介するとともに、両国を舞台に愛・慈悲・平等と寛大をうたった「アンコール・ワットの青い空の下で」(1997年度シアヌーク国王文学賞)をはじめ、自らも小説やエッセイなどを手がけている。これらの作品を通じて、同氏の祖国カンボジアへの誇りや、第二の祖国となった日本への愛情の一端を垣間見ることができる。

セタリン氏は、内戦時代から悲惨なまま放置されていたカンボジアの国民に医療品を届け、未来を担う母国の子どもたちのため学校建設や奨学金事業に取り組むなど、休む間もなく文化復興に奔走しているが、故永六輔氏をはじめ、セタリン氏の生き方に共感した文化人は数多く、同氏が手がけるカンボジアレストランは、文化人のサロンとして今も親交の場となっている。

またセタリン氏は研究者としても一流の顔を持ちあわせている。

たとえば、ベトナム・メコンデルタのクメール・クロム(カンボジア人)がプレ・アンコール時代(7世紀)から語り継いだクメール民話を初めて調査。カンボジア本土の民話との比較や日本の龍神とカンボジアのナーガ伝説との比較などを通じて独自の学説を展開し、天竺(インド)の『ジャータカ』のカンボジア版を基軸にカンボジアの『チアドク』と日本の『三宝絵詞』や『今昔物語』などの仏教説話を比較検討するなど、カンボジアと日本の比較文化論とも評される一連の調査・研究活動は、高く評価されている。

セタリン氏は2010年からプノンペン王立大学の言語学部教授に就任したこともあり、現在は東京とプノンペンを行ったり来たりの多忙な毎日をお過ごしであり、文字どおり日本とカンボジアの懸け橋となっている。

ポル・ポト政権崩壊から40年が経過し、カンボジアの教育水準は少しずつ向上しているが、いまだ地方での識字率は低く課題も山積している。そんな中で支援に努力を惜しまないセタリン氏の姿勢は賞賛に値する。

以上のとおり、諏訪井セタリン氏が、カンボジアにおける教育支援活動に長年果たしてきた貢献は著しい。よってその功績は大同生命地域研究特別賞にふさわしいものと高く評価する。

(大同生命地域研究賞選考委員会)